
despair

十六夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

d e s p a i r

【Nコード】

N 8 6 4 6 K

【作者名】

十六夜

【あらすじ】

普通の生活を送っていた高校生、まえはら だいき前原大貴その日常はとあるきっかけにより崩れさった……

現在

第六章執筆中

3 / 2 3 変更 雨風↓風見

プロローグ 雨（前書き）

初投稿です。

下手かもしれませんが頑張って書いていきます。

加筆と文章の結合をしました。

プロローグ 雨

大量の雨が降る中、その場所だけが赤く染まっていた。

そこには二人の少年がいた、しかし片方の少年はうつ伏せになったまま動く事はなかった。

もう片方の少年の手には長いハサミが握られていた。そのハサミの刃の部分は銀色ではなく、黒ずんだ赤色の液体で濡れていてぼたぼたと地面に落ちていた。

少年は呆然としていたが、突然はつとなるとハサミを捨てて倒れている少年へ駆け寄り何度もその少年の名前を呼んだ。

「——」 「——起きてくれよ。」 「——お願いだ起きてくれよ。」

もう二度とその少年が起きないと分かったと、少年は泣き出した。

何分かたち涙が治まってくると、少年の目には倒れている少年を刺したハサミが見えていた。

少年はそのハサミを手に取り倒れている少年の下に駆け寄り、何度も何度も「ごめんな、ごめんな。」と呟いて、そして少年は自分の心臓へとハサミを突き刺した。

血が沢山流れ出て意識が遠いていく中、少年はずっと「許してくれ、許してくれ。」と言っていた。

そして死ぬ直前、眩い光に包まれて、どこからともなく声が聞こえてきた。

その声があったことを聞きとめた後、少年は息絶えた。

プロローグ 雨（後書き）

感想、アドバイス良かったら下さい。

第一章 日常

俺の名前は前原 まえはら 大貴 だいき、好きな事は音楽を聞く事と漫画を見る事だ。俺が通っている学園は全国の中でもトップクラスの学力と人気を誇る高校、聖秋学園 せいしゅうがくえん である。

トップクラスと言っても全てが出来る天才は東京第一学園に行く、聖秋学園は1つもしくは2つの教科が飛び抜けて出来るが他の教科は普通、壊滅的な人達が来る。

その為受験の時は自分で英語、古典、現文、数学、理科、日本史、世界史の中から1つもしくは2つ選択する。

1つの場合は1000点、2つの場合はそれぞれ450点で受験をする。この学園が出来たおかげで1つの教科が天才でも他の教科が出来なくて社会や大学に認められなかった人達が活躍する様になり、東京第一学園と同じ位人気の学園になったのだ。

この学園の全校生徒は合計1000人、三年生と二年生が350人、一年生が300人である。

俺の受験した年は少子高齢化が原因で去年よりも50人も入れる人数が少なくなった。正直俺たちの年からではなく来年からに欲しかった。入れる確率がかなり低くなり絶望的な状態で当日受験したが、なんとかこの学園に入れた事を俺は神様に感謝した。

この学園に入って半年がたった今、俺の周りには男女合わせて6人の友達がいたので休み時間などはまったく退屈しなかった。唯一嫌な事は一週間に3回もある小テストが昼休みにある事だ、ある日は月水金だ、貴重な昼休みを取られるのは凄く嫌だった。

今日は火曜日なので小テストは無く、友達と楽しく話していた。

紹介しよう、今俺と話しているのは風見 かざみ 柊 しゅつ と園町 そのまち 彰太 しょうた である。

柊は俺と一番最初に仲良くなった友達である。大の小説好きで、大

抵の小説の名前と内容を知っている。特に推理小説が好きで持っていない推理小説は無いんじゃないかと言うほど知っている。

柊の家には行った事はないが、本人の話だと部屋の本棚だけでは足りないほど、本を持っているらしい。柊はライトノベルや漫画も読むので、そっちの話でよく盛り上がる。

彰太は漫画がめっちゃくちゃ好きでいわゆるオタクである。（ただし本人は認めていない）よく彰太とは漫画の貸し借りをする。

他の4人へ貸したりするのも、大抵俺と彰太である。ほとんどの休み時間はこの2人と話をしている。

「それでな、その漫画を買おうとしたら突然横から取っていかれたんや。」

「うわー、それは最悪やな。」

「くそー、あのやる今度会ったらただじゃあおかないぞ。」

彰太の同意の言葉を受けた前原の背後からはメラメラと炎が出ていた。

「まあまあ、でも別のブツ。・オ。で見つけたんやろ、しかも最初の店よりも145円得したんだし。」

前原「それでも許せん、そのせいで本を見る時間が一時間も削られたんやぞ。」

風見が前原の怒りを抑えようとしたが全く効果は無く前原の背後の

炎が更に大きくなって爆発しそうになった時にナイスタイミングで割り込んで来た女子がいた。

「前原君。この前借りた漫画返しに来たよ」

彼女の名前は西沢にしざわ 優歌ゆかである。

彼女は、先ほど紹介した柊と同じ部活で硬式テニス部にいる部長である。（三年生が引退して二年生は軟式しかないため）更に囲碁部と作法部にも兼部していて、どちらでも時期部長候補である。しかも来年には生徒会長にも立候補しようとしている秀才なのだ。（ただし超機械オンチ、例えば携帯のメールが打てないほど、本人も認めている）

本当は東京学園に行こうとしていたらしいが、家の経済状況の関係で特別推薦の貰えたこっちに來たらしい。

俺と知り合った理由は、西沢さんが柊と部活の事を話し合っていた時に俺が柊にちょっかいをかけていたら彼女が音楽好きだという事が分かり、柊とも親しかった事もあり仲良くなった。今では音楽の話やCDの貸し借りだけで無く、漫画を貸してその漫画の話をしたりもしている。

「この漫画も凄く面白かったよ、早く続きが読みたいなー」

「悪い、この次の巻は柊が借りているんだ。」

「えー、柊君早く返してよ!。」

「ごめん、最近親の監視がきつくなつて来てなかなか見れないんだよ。」

「もー、それじゃあ前の巻貸して、もう一度読み返すから。」

「分かった、えーと確かこの辺にー……」

「大貴…、勝手に教室の色々な所へ隠すなよ。」

「いいじゃん別に、ロッカーに入り切らない本くらい。」

「いや…。普通そんなに学園に漫画は持って来ないだろ……。」

「あれーおかしいな、何故が一巻しか無い。」

「無視かよ。」

俺が柊と会話をしている所へ突然別の誰かが声をかけて来た。

「それは残りを僕が全部借りているからだよ。」

「わ！、びっくりしたー。」

いきなり声が聞こえて来たので柊以外の全員が驚いた。

「なんだよ、僕がただで何でそんなに驚くんのだ？」

「だって、たった今まで中林の存在に気づかなかったんだよ。」

俺が言い返した後彰太が

「て言うかいつから居たんだ？」

と疑問を投げかけたが柊が答えてくれた。

「大貴が漫画を横取りされた話位からだよ。」

「まじ!!」

柊からの予想外の言葉に俺は驚いてしまった。

「うつ……。僕ってそんなに影薄い？」

とだんだん中林の周りの空気が暗くなつて来ている。

「気づかなかった……。」

俺と彰太はそう呟いてしまった。

彼の名前は中林^{なかばやし} 和輝^{かずき}この学園の中でも上位3位に入る天才だ。

ただし名前に光という字が入っている割にはとても暗い性格だ。

そのせいで中林自身の存在もほとんど無いに等しい、唯一柊だけは中林の存在がいつでも分かるらしい。

この学園では珍しいほぼ全ての教科で上位に入っている人物だ、何故聖秋に来たかという、東京学園には行きたくなかったから此方に来たらしい。

あんまり詳しくは聞かなかったが多分東京学園に同じ学園に行きたくない人がいたんだろうと思う。

俺と知り合っかけとなったのはこれまた柊が関係していて、柊

と中林は図書委員でその当番の話し合いをしていた時に（この時は中林が見えていた）こいつらとなら仲良くやっていけれそうだと俺の直感が思い声をかけたのがきっかけだ。

最初は少し話をする程度だったが、遠足のバスの座席を決める時に柊が「ところでお前の名前何だっけ？」と言う一言が原因で親しくなった。（因みに俺は今でもその事を恨んでいる）

「本当にごめんな西沢さん、僕もまだ読み終わりそうに無いから。」

「そんなー」と中林からの申し訳なさそうな言葉に西沢さんが八方塞がりになって困っている所へ、俺に声をかけて来る人物がいた。

「おい、大貴、今日の部活休みになったって。」

「まじ！！よっしゃ、授業終わったらブ。ク。。フにいくぞー。」

「勉強しなくていいのかよ……………」。

俺の答えに柊がツツコミを入れてきたが俺はあえて無視した。

彼の名前は藤原^{ふじわら} 雄大^{ゆうだい}、俺と同じ部活（吹奏楽）で一緒に楽器の話をよくする友達だ。（因みに俺はバリトンサックス藤原はホルンだ）

「風見の言う通りだぞ前原、明日はお前の苦手な数学の小テストだろ。ちゃんと勉強しないとまた落ちるぞ。」

「そつだぞ大貴。」

藤原からの注意に柊も乗っかって来た。

「うつさい、お前に言われたくはないぞ柊、大体お前は英語の小テスト一回も受かった事無いだろ。俺は少なくとも三回は受かった事があるぞ。」柊にだけは言われたくないので俺は反論した。

「う…………、それは…………、もう諦めているからいいんだよ!!」

「「諦めるな!!」「」」

柊の言葉に全員が注意した。

まあこんな感じで話をしているうちに次の授業の予玲のチャイムが鳴った。

「そついえば次の授業って何だっけ？」

「えーと確か次は…………。」

中林の言葉に柊が答えようとしていた時

「次の授業は情報で移動教室だよ。」

と突然前原の後ろから声が聞こえた。

「わ!!晶いつからいたの?」

「ついさっきだよ。」

西沢さんの質問に答えている彼女は浅倉 晶、漫研に入っている人だ。

漫研に入っているだけあって、漫画の事を良く知っていて、絵のセンスもめちゃくちゃいい。

俺は普通に漫画の話をしているだけなのだが、柊達曰く俺と彰太と浅倉さんが漫画の話をしていると誰も付いていけない位マニアックな話になっているそうだ。

この6人で俺達は毎日を楽しく過ごしている。

「て言うか次の授業まで後3分だぞ!!」

「やべ、急がないとあの先生めちゃくちゃ厳しいぞ。」

柊と彰太のその言葉で俺達6人は一斉に教科書を取り出してパソコン室まで走り出した。

第一章
日常
了

第一章 日常（後書き）

感想、アドバイス良かったら下さい。

第二章 不良少年と毒舌少女

結果を言おう、俺達6人は授業までに間に合わなかった。本当ならギリギリ間に合ったはずだった。しかし途中で邪魔が入った。

+++++

情報室は三階にある、俺達の教室は二階にあるので、階段を駆け上がった時にあいつと出会った。あいつは三階の階段の前に立っていた。

「おいおい、こんなに遅い時間まで何をやってたんだ？」

「喋っていたら遅れたんだよ、悪いけど通らしてくれないか？」

「何で俺様がここを退かなくちゃいけないだ？嫌だよ、俺様より遅く来るやつは俺様を倒していけ。」

俺と今会話しているのは、荒川あらかわ 龍太りゅうた学園で暴れ回っているいわゆる不良というやつだ。学力は俺達よりも遙かに下の位で、この学園に入れるレベルでは無い。何故そんなやつが居るのかと言うと、この学園の理事長と校長がやつの叔父と父親だからだ。自分達の面子の為に無理矢理入れたらしい。

本人はそんな風にして入ったので好き勝手にしている、大抵授業は受けないしタバコは吸うしピアスもしてくる、周りの先生も理事長と校長を恐れて手を出さないでいる。

そしてあいつは自分の気に入らないやつをいじめて来る。大抵一週

間から二週間で相手を変えるのでそこまで被害を受けた生徒は居なかった。

一番酷い被害を受けた人は荒川に嘘の噂を流されて彼女と別れたという生徒だ。しかし、今被害を受けている生徒はもう約五週間にのみなる、その生徒とは前原、つまり俺なのだ。

なぜそんなにも俺に対してのいじめが長いのかは、荒川本人以外誰も分からない。

「倒すって……どうやってだ？」

「もちろん暴力でだよ。」

とニヤニヤしながら言ってきた。

当然だが体格のいい荒川に小柄な俺が勝てるわけがない。それを知っていて言っているのだ。

「荒川なんかには勝てるわけ無いだろ。」

そんなやり取りを俺と荒川がしている間5人はどうすればこの場を逃げ切れるかを考えていた。ただしその中で風見は話し合いに参加せず、荒川の事を見ていた。そんな様子を西沢だけが知っていたが風見がどんな感情を持って見ているかは分からなかった。

「そこ、何をやっている。」

「あ、先生、すみませんちょっと荒川君と話をしています……。」

中林が嘘を言ったがもちろん先生はどうして遅れたかは分かっている。

る。しかし俺達の担任の先生は「お前ら6人は後で反省文だ、早く教室にいけ。」と言われた。

その中に荒川が含まれていないのは当たり前だ、しかし先生は俺達が荒川から逃げられるようにしてくれた。これが先生の精一杯のサポートだった。

「わかりました。」

そう俺は言っただけで俺達は情報室に向かった。

荒川は「ちえ」と舌打ちをしていた。

風見はそんなやり取りをしている間もずっと荒川を見ていた。

西沢はどうして荒川を見ているのかを不思議に思っていた。

+++++

パソコンのカタカタという音だけが鳴っている中、突然放送がかかり先生の名前が呼ばれた。

「僕がいない間もしっかりとやっているように。」

そう言っただけで先生は出て行った。無論言うことを聞く生徒などほとんどおらずほぼ全員が立ち上がり、友達の下へ行き雑談話を始めた。俺達もいつも授業が始まる前に集まるいつもの場所へ集まった。

集まる場所は冬の席だ。冬の席は一番後ろにあり、その周りの人たちは別の場所に行ってしまうのでそこだけ椅子が大量に余るからだ。その椅子に俺達は適当に座り話を始めた。

話の話題を作るのは大抵俺だ、今回は3日前に発売された漫画の話をした。

「でさー、その内容が俺はいまいち気に入らないだよ。」

「え…そうか、俺はなかなかいいと思うけど。」

「私も園町君と同じだよ。」

「嘘だろー、…西沢さんはどうなんだ？」

彰太と浅倉さんと意見が食い違ったのがショックだったが西沢さんはこっちの意見の味方だと願いながら声をかけた。

「えーと…私は……………ごめん分からない、柊君はどう？」

西沢さんは逃げ柊にバトンをパスした。

「……………」

しかし柊から返事は返って来なかった。俺達とは違う方向を見ている。

俺は柊が見ている方を見てみた。他の皆もそちらの方向を見た。そこにいたのは村井^{むらい} 學^{がく}と瀬戸^{せと} 斎^{いつき}だった。

俺が知る限り柊はあの2人とそこまで親しくは無かったはずなんだけれどもなーと思っていたら2人の話が聞こえてきた。

「それでさー、そこにいた警察はもうかんかんだつたよ。」

「そりゃそうだろ、元々警察が捜査をて犯人のいる場所まで特定したのに、その後を全部^{アンツ}ANTSが勝手に犯人逮捕して身柄を持っていかれたんだもの。」

「いや、でもあの状況は警察には……………」

その会話を聞いて俺は柊に、「柊、お前ANTSの事が気になるのか？」

と聞いてみた。

「え……、いやそう言う訳では無くて…、えっと…、そんな凄い組織に入ってみたいなと思って。」

俺は出鱈目だと分かっていたが、本当の事を言いたくなさそうだったので、その話を繋げる事にした。

「何言ってんだよ、柊じゃANTSには入れないよ。」

「そうそう、あそこに入るなら頭が凄くいいか運動がめっちゃくちゃ良くないときつと入れないぞ。」

と彰太が俺に同意して来た。

「それなら中林だったら入れるかもな。」

「優香も入れるんじゃない？」

藤原と浅倉さんの言葉に2人は

「そ、そんな所に入れる訳ないよ。」

と2人は必死で否定した。

「でもさ柊、もし入れたら何をするんだ？」

中林の質問に柊は

「えっと…戦闘のサポートかな……。」

と答えたが彰太に

「どじって周りに迷惑かけそうだ。」

と言われていた。

「そんな事ないよ!!」

と柊は言ったが俺は

「いや、有りそうだな。」

と言ってやった。

「」「うん、うん。」

他の3人も頷いてくれた。

「そんなー」。」

説明した方が良かったろう。ANTSとは4年前に出来た警察の様な組織である。しかし、名前は分かっているものの詳しい内部の事は分からず、漫画に出て来そうな裏の組織である。そこへの入り方も分かっていない、時々テレビに出てくるANTSの人達も教えてはくれないらしい。

最近によく警察が捜査している事件を勝手に解決して処理したりという事が多いらしく、警察の方では公務執行妨害で内部調査をしようとしているらしい。この事に対して政府は黙認している。

しかし国民からの反発は強いようだ。

実際ANTSが出来てから迷宮入りする事件が40%から15%に減り、犯罪発生率も低くなったからだ。

とにかく謎の組織で将来警察よりも入りたいと言っている人も増えてきた。

廊下から足音が聞こえて来た。

「先生が帰って来たぞ！！」と誰かが言った。

俺達は元の席に戻った。

+++++

火曜日の最後の授業は古典なのだから今日は授業変更で体育になり男

女共にサッカーだった。

本来なら二チームに分かれて同時に試合をするのだがグラウンドを男女で半分にして使っている為今回は片方が試合をしてもう片方は見学となった。

俺達D組はC組の男子と試合をしていた。人数の関係でAチームとBチームの2つに分かれたのだが今回は運が悪かったらしく、俺だけがBチームになり柊、彰太、藤原、中林はAチームになってしまった。

話し相手もいず暇だったので試合をボーと見ていた。今回のAチームは彰太と藤原が主になって攻めて行っている。彰太は今部活に入っていない。理由は中学の時は色々な部活をやっていたらしく、どのスポーツもめっちゃ上手い、その為良く助っ人として呼ばれるので入部はしていないが殆どの部活に日替わりで出ているからである。藤原は元々運動神経が良いらしく彰太ほどでは無いが上手い。

まだ10分しかたっていないがちょうど彰太がゴールを決め2-0になった。

今度はC組のBチームが攻めてきた。どうやらC組は運が良かったらしくサッカー部が3人もいる。Aチームは運動が出来るのが彰太と勇大しかいないので、2人が抑えられてる間に残った1人が攻めて来た。DFにいたのは柊と中林だった。本当は後2人いた筈だが彰太と藤原の援護に行こうとしていたらしく慌てて戻って来ているが間に合いそうに無い。

柊と中林が2人がかりで止めようとしたがあっさりとかわされてゴールを決められた。まあ仕方ないだろうと俺は思った。

柊はテニス部に所属しているから体力はまあまああるがテニス以外の運動は全く出来ない。以前の体育でやったバスケットやバレーでも下

手だった。

中林は本当に勉強しか出来ない運動神経0の典型的な人だ。それでも頑張つてやろうという気持ちがあるだけ他の運動神経が無い人よりはましだ。

どうやらこっちのチームは一点のリードを守り切る為に全員でDFをするか、このままのやり方で続けていくかの二択を相談しているらしい。30秒ほど話し合ったあと試合が再開された。

彰太と藤原が攻めていった所を見ると後者の方を選んだみたいだ。そんな風に試合を眺めていると後ろから声をかけられた。

「随分と無謀な方を貴方達のチームは選択したみたいだね。」

後ろを振り向いて見るとそこにいたのはC組の川原 かわはら 由季 ゆき だった。

彼女は小中学校が俺と一緒になのだが何故か一度も同じクラスにはなつた事がなく、全てお互いが隣のクラス同士と言う奇妙な腐れ縁である。中1の時にその事に川原が気付いて声をかけて来たのがきっかけで、体育の授業位でしか会わないのに親しくなった。

高校になってからもその関係は途絶えず、彼女はまた俺の隣のクラスのC組に入ってきた。

中学の時と違うのは部活が同じ吹奏楽部なので体育以外でも部室で話す様になった位だ。体育と部室以外ではお互いに話しはしないので俺の友達も藤原以外は川原さんと親しいとは知らない。

因みに川原さんは毒舌だ。

「川原さんもBチームなのか？」

「僕はBチームだよ。まあ僕達のAチームはお互いに良い試合をしているけどそっちのAチームはもう決着がついちゃったみたいだね。」

俺は女子の試合の方を見てみた。確かにお互いに互角の試合をしていた。C組もD組も攻撃と防御にそれぞれ指示する人がいるみたいでボールを取ったり取られたりを繰り返している。

相手のチームは分らないがD組の攻撃の指示を出しているのは西沢さんだった。西沢さんも藤原と同じでどんなスポーツでもそこそこ出来るみたいだ。

防御の指示は浅倉さんがしていた。浅倉さん自身は運動は得意では無いみたいだか指示は結構上手らしい。

そんな様子を見た後俺はさっきの川原さんの言葉に疑問を感じたので尋ねてみた。

「どういう事だ？まだ時間はあるぞ。」

「そっちの試合を見てたけど最初の方C組は様子見をしていたからゴールを決めたけど、その間にC組はD組のチームは園町君と藤原君以外は余り上手く無い事を見抜いている。だからもうD組はゴールを取れなくて取られると思うよ。」

Dクラスの方の応援からの声が聞こえた。どうやらボールを取られたいらしい。

俺は振り向いて見てみるとその時にはもうC組はDF陣を抜き去ってゴール前まで来ていた。GKもシュートを防ごうとしたがフェイントをかけられてあっさりとゴールをされてしまった。

「ほら、あんな風に。」

「……………」

俺は言葉を返す事が出来なかった。

結果は川原さんが言った様にあれ以降点数は取れずに2ー6で試合は終わった…………

因みに俺達Bチームは3ー1で勝った。

第二章 不良少年と毒舌少女

了

第二章 不良少年と毒舌少女（後書き）

感想アドバイス、良かったら下さい。 m (——) m

第三章

忠告（前書き）

短いです。

第三章 忠告

SHLが終わり学校の帰り道俺はいつも一緒に帰るメンバー、柊と西沢さんと話ながら帰っていた（他は皆帰り道が違ったり、部活の終わる時間が違つたため普段は一緒には帰らない）

「それで、お辞儀をする時は……」

「おい、前原君。」

西沢さんの簡易作法の講習を受けていると後ろから俺に向かって声を掛けてくる人がいた。

俺達は立ち止まって近付いて来るのを待った。声をかけて来たのは村井君と瀬川君だった。

「どうしたんだ？」

と俺が聞くと

「いや、実はちょっと言っておこうと思って……荒川の事なんだけども。」

「荒川がどうかしたのか？」

「俺達はお前らの前に荒川に目をつけられていたんだけど……」

「けれども？」

「最近荒川の様子がおかしいんだ。凄くイライラしているみたいで。」

「イライラしているのはいつもの事じゃあないのか？」

「そうじゃないんだ、俺達の時よりも凄くイライラしているみたいで、この前あいつの横を通りすぎた時に 殺したい、殺したい っ て言っているのが聞こえたから。今、目つけられているの前原だろ、気をつけた方が良くかもしれない。」

「まじかー!!」

「ああ、まじだよ、それと風見君や西沢さんも気をつけろよ、もしかしたら巻き添えを喰らうかもしれないから。」

「うん、分かったよ十分気をつけておくよ。」
と柊が言い

「大丈夫、皆で周りを見張っていれば何とかなるから。」

と西沢さんが言った。

「そうか……………気をつけろよ。じゃあまた明日。」

そう瀬川が言って2人は俺達の帰り道とは違う道へ入っていった。

「それにしても、あいつがいつもよりもイライラしているってどういう事だと思う柊？」

「……………」

俺の質問に柊は何かを考えているようで何も答えなかった。

「柊君？」

「……………そうか……………」

と風見は小さく呟いたがその声は2人にはとどかなかった。

村井と瀬川の忠告が後に重大な事になるとはこの時の俺達にはわからなかった。

第三章 忠告（後書き）

感想アドバイス、良かったら下さい。 m (|) m

第四章 違和感（前書き）

- 「」……普通の会話
- ……会話の中の会話
- （）……補足
- 『 』……心の中の気持ち
- 【 】……重要単語
- + ……場面切り替え

第四章 違和感

俺は今電車に乗っている、何でたろうブツ。・オ。に寄ろうとしていたのに……家にそのまま帰ろうとしている。

さっきの２人の話が気になってしょうが無かった。荒川がいつもと違う、殺されるかもしれない、だから怖くなって俺は早く帰ろうとしているのか？

自分自身が分からなくなってきた。今まで何回も荒川の事は色々と言われたが別にそこまで怖く無かった。それなのにどうして今になつて………………。。

ポケットの中に入れていた携帯が震えだした、誰かからの電話だ。見てみると西沢さんからだった。

「もしもし」

「あ、良かった、繋がった。」

「おいおい、いきなりどうしたんだよ？」

「今日あの２人に言われた事が気になって……。」

「ははは……大丈夫だつて。」

俺は西沢さんの話しにちゃんと返事をしながら心の中でおかしいと思っていた、さっきまでもややもやとしていた気持ちが一気に晴れたからだ。怖いという感情も出てこず逆に何故か安心する様な気持ち

になった。

どうしてだろう……。

答えは直ぐに出た。友達と一緒にいるからだ。思い返せばいつも俺の周りには友達がいた。一緒にいなかった時なんて殆ど無かった。だと今は1人だ、不安が有るときはいつも周りに友達がいて相談する事が出来た。帰る時には不安な事は何も残らない、だけど今回は相談する事も出来ないまま帰っていたから不安だったんだ。

でも今俺は西沢さんと話している、だから安心出来るんだ。だってこの電話を切ったらまた不安な気持ちになるんだろうか？……いや大丈夫だ。

明日はまた皆と会える、不安はその時にきつと消えるだから安心出来る。そう思い俺は「それじゃあな。」

「うん、また明日。」

と言う声を聞き通話を切った。

もう不安は無かった。

+++++

次の日、朝のSHLが始まる前に俺達6人は集まって昨日の事を話した。

「まじかそれ、あいつ、あれがいつもよりも怒っているのか？」

「しかも 殺したい、なんて言っていたのか？」

藤原と彰太の質問に俺と西沢さんは

「ああ、まじだ。」

「あの2人は嘘は言わないと思う。」

「だから皆気をつけて欲しいんだ。俺のせいで巻き込ませて…………。」

そう言つて頭を下げた。

「謝る事はないよ、誰もこんな事になるなんて思つても無かつたし、皆でいれば何とかなるよ。」

「そうだね…………今日はなるべく6人で行動しよう。どんな時でも1人にはならない様に最低でも2人組で行動しよう。特に前原は。」

そう浅倉さんと中林は言つてくれた。だから俺と西沢さんも普通に話を続ける事が出来た。

「今日の1限目は体育だから気をつけてね。もしかしたら何かされるかもしれないから。」

「そうだな、今日はバスケだからもしかしたら顔にボール当てられたりするかもな。」

「最悪の場合、試合中に足に何かされるかもしれないぞ。」

俺と藤原の会話を

「大丈夫、大丈夫、あんまりマイナスに考えないほうがいいぞ。」

「そうそう、何とかなるって。」

と彰太と浅倉さんが場の雰囲気明るくしてくれたのでその後は楽しく会話が続けられた。

その時俺は気づいていなかった、柊が会話に参加せずに何かを考えていた事に……

+++++

その話をしてからもう6日がたった。それまでの間全員が注意をしていたが、特別何かしてくる様子は無かった。今日は火曜日、あの2人から忠告を聞いた日だ。

俺はいつものように学校へ行くために電車を待っていた。

だけど何かがおかしかった、俺は周りを見渡したが何も変な所は無い、気のせいだろうか……

やっぱり朝のあの事が引っ掛かっているのだろうか……。

+++++約30分前……

いつもの様に朝食の食パンを食べていたら電話が鳴ってきた、母さんが取ったのでまた食べ始めようとしたら「大貴ー風見君から電話

よ。」と言われた。

「柊から？」どうして携帯にかけて来なかったのか不思議に思ったが（電話の後、携帯の電源を切っていた事を思いだした）取り敢えず電話に出た。

「もしもし、柊？どうしたんだこんなに朝早くから。」

「前原……………学園で気をつけろ、後屋上にもな。」

「は？」

「死ぬなよ。」

「おい！！という事だよ。」

……………その後聞こえて来たのは電話の切れる音だけだった。それから何度か柊に電話をかけたが、電源を切っているらしく繋がらなかった。

+++++

俺はその後電車の中でも、学校に行くための長い坂道を登っている間もずっと胸に違和感が押し上げてきた。学園に行ってはいけない、そんな感じがした。

だけど俺はその思いを気のせいだと払いのけ校門まで来た。まだ学園の中は見えていない、目を閉じているからだ。目を開けてはいけない、心のどこかがそう叫んでいる。

大丈夫だ中には皆がいる、きっと大丈夫だ。そう思い俺は目を開けた。

そこは.....

.....

.....

いつもと変わらない風景だった。俺は安心して学園に入って行った。

++++++

この日俺の楽しい日常は崩れさった.....

第四章 違和感（後書き）

感想、アドバイス良かった下さい。 m (|) m

第五章 炎と絶望と壊れた日常（前書き）

視点変更があります。

第五章 炎と絶望と壊れた日常

「はあ……はあ……くそっどうなってるんだよ……」

俺は今保健室にいた。いや、保健室だった所にいた。その部屋は真っ黒になっていてまだ消えていない火も幾つかあった。唯一この部屋で原型を留めていたベッドの下に俺は隠れていた。

「あいつ、一体何をしたんだ……」

++++++約1時間前 昼休み……

俺達は何時ものように集まって話をしていた。昼休みに全員が集まって来れたのは久しぶりだったので大分盛り上がり過ぎて会話をしていた。

「それがさー前に柊の言っていた本は見付かったんだけど、俺の欲しかった本は見付からなかったから柊の本を代わりに買ってやろうか迷って……」

そう俺が言つと迷いもせずに彰太は

「いや、そこは買わずに別の本屋に行って自分の分を探すだろ。」

そう言つと西沢さんと浅倉さんが批判した。

「酷いー、それでも友達。」

「本当だよ、そこは買ってあげるべきだと思うよ。そうでしょ柊君？」

「えと…、でも大貴もお金が少なかったみたいだし……」

柊がどう答えたら良いのか困っている内に藤原と中林が早く続きを知りたかったらしく

「で、結局大貴はどうしたんだ？」

「やっぱり園町の方なのか？」

と言って来たので俺は答える事にした。

「それは…… ぎゃあああああー だよ。」

突然どこからか叫び声が聞こえた。どうやら外かららしい、無論の事教室にいた全員が窓から外を見ようとした。

俺達はドア側の方で話をしていたので皆よりも遅れて窓に近付けなかった。

「何があつたんだ？」

と彰太が窓から見ている人に声をかけたが反応がなかった。じつと外を見ているだけだ。

仕方なく俺達は見えている人達の間を通り窓の外を見た。そこから見たのは、黒い何かと荒川だった。

これがどうしたのかと俺は思いながらもう一度よく見てみた。別に何もおかしい所は無いなと思いつつながら黒い何かを見た。

「え……………嘘……………だろ……………」

俺の出た声はそれだけだった。認めたくなかった、しかしあの黒い何かは間違いなく……

俺達の担任の先生だった。

荒川が何かを言った様に見えた。

その声は段々大きくなってきて何を言っているのかわかった。

[illegible]

は
は
は は は は は は は は は は は は は は は は は は は は

「

意味の分からない叫び声だった。そして突然荒川がこっちを向いた。誰を見ているかは分からなかった側少なくとも俺ではなかった。

「殺してやる、全部を、全てを、何もかも、ここにある全てを壊してやる――」。――」。

そう叫んだ瞬間、荒川の周りから炎が出てきた。真っ黒い炎だった。その炎が荒川の周りをぐるぐると回っていた。

荒川が此方に手をかざした、その時俺は何か嫌な予感がして窓から逃げる様に離れた。彰太や西沢さん達、ほとんどの人が俺と同じ行動をした。

何人かはまだ窓から離れて居なかった。俺がドアから出ようとした直後教室の窓が炎で吹き飛んだ。俺達は夢中でその場から逃げた。叫び声が聞こえ、炎が何回も見えた。俺は無我夢中で走り続けた……

.....

+

そして今に至る。

暫くの間じっとしているとさつきまで聞こえていた爆発音が聞こえなくなった。俺はベッドの下から這い出て、足音をたてない様にしながら静かにドアを開けた。辺りを見渡したが黒い色の小さな炎が出ていくくらいで何もなかった。

俺は中に戻りほつと溜め息をついた。それから皆の事が心配になり、6人にメールを送った。

メールを送ってから大体10分位たった頃メールが連続で何通か返ってきた。来たメールは合計で四通だった。一つずつ内容を見てい

くと返信してきたのは彰太と藤原と中林と浅倉さんだった。どうやら全員別々の場所にいるみたいだが無事らしい。俺は一先ず安心すると全員で集まろうと思いい保健室に来てくれと返信した。今度は1分も経たない内に分かったと返信してきた。念のため柊と西沢さんにはもう一度メールを送っておいた。

「皆……ちゃんと来てくれよ……。」

火の焼ける音に俺の声は消されてしまった様に思えた……

++++++中林side……

「ふー、一樣メール送ったけど……これ絶対やばいよな。」

今僕は図書館にいる、僕と同じ様にここに逃げてきた人もいたが知らない人ばかりだった。

何故ここがやばいのかと言うと、図書館は4階西側にあり3階に降りるまでずっと一本道である。

つまり荒川が来たら逃げ道が無いのだ。

「とにかくここから離れよう。」

そう思い僕は階段をゆっくりと降りた。ついて来る人はいなかった。階段を降りきり3階に到着し

「さて、どっちへ行く方が保健室に近いかな?……」

と2階へと続く階段と2棟に繋がる通路を見ながら言った。しかし考えている間に下から爆発音と声が聞こえてきた。

「よし、こっちに行こう。」

そう言つて通路の道を歩き出した時後ろから爆発音が聞こえ思わず振り返つた。その爆発の煙の中から……

+++++園町side…

「さて、メールは送つたし、さつさと保健室に行くか。」

今俺は2棟の西側1階の玄関前を歩いていた。

「けど……保健室つてどこやったっけ。」

一番肝心な所を忘れていたので仕方無くもう一度大貴にメールを送ろうと思い、携帯を取りだそうとした。だが…

「ははは……1人見つけた…」

と声が聞こえた。

俺は違つていてくれと願いながら後ろを振り向いた、しかしそこには願いを裏切るかの様に荒川がいた。

俺は全力で走つた。

幸いにも荒川との距離は遠かつた、それに俺自信中学では陸上部で今も色々な部活に顔を出していたので走りには自信があつた。

後ろから何度も爆発音が聞こえて来たが俺の体には当たる事なく、そのまま1棟に続く通路を渡って行き、階段を3段飛ばしで上がった。いった。

そして3階まで上りきつた瞬間、後ろから今までで一番大きな爆発音が聞こえた、それと同時に目の前にいる人物に気付いた。

++++++中林side…

「園町君！大丈夫か？」

「そんな事よりも早く逃げるぞ。」

と言うと園町君は僕の制服の襟を掴んできた。僕は慌てて

「大丈夫だよ、さっきの爆発で階段が壊れたみたいだから。」

「へ……？」

そう僕が言うのと園町君は後ろを振り向いた、そこには見事に壊れた階段と向こう側から荒川が恨めしそうに睨んでいる姿があった。

「た、助かった…。」

そう園町君は言うといきなり倒れた。

「だ、大丈夫？」

「ああ、大丈夫ちょっと腰が抜けたただけだ、それよりも保健室ってどこだっけ？」

「それなら良かった…、保健室なら1棟の1階だけど。」

「え…それってやばいぞ、俺そこ通ってここに来たから。」

「大丈夫、反対側だから。」

「そうか、良かった。」

「だけど、荒川が今は近くにいるから遠回りして行こうと思うんだけど…」

「俺は別にそれで良いけど、具体的に何処から行くんだ？」

「まず3棟までこのまま通路を渡って行って3棟で1階まで降りて保健室まで行こう。」

「了解、そうと決まったらさっさと行こう。」
そう言って僕達は歩き出した。

+++++藤原side…

俺はさっきからずっと走っている、理由は保健室に行く為だ、最初の内は歩いて探していたがなかなか見つからず最終的には走って探している。

（藤原は勘違いをしていた、保健室は1棟にあるのだが藤原は2棟だと思い込んでいる。）

「何故だ、何故どこにも保健室が無い…………駄目だ、疲れた…ちょっと休憩しよう。」

俺はその場に座り込もうとしたが、どうせなら風のある場所にしようと思い、1棟に続く通路の所まで歩くと座り込んだ。

「はあ……………、皆大丈夫かな？」

そう思いふと1棟の方を眺めたら、向こうの階段から降りてくる2人組が見えた。よく見たらそのうちの1人は浅倉さんだった。

俺はちょうどいいと思い声をかけたが、誰かから逃げてでもいるのか2人は此方に気付かなかった。

「まさか……………荒川から逃げているのか!!」

そう俺は思うと囨になろうと思ひ。荒川が来るのを待ったが、荒川が来る様子は無かった。

「……………じゃあ何であんなに必死だったんだろう?……………とにかく2人を追いかけてみるか。」

そう思ひ、俺は2人を追いかけるため走り出した。

++++++浅倉side…

私はメールを打った後ずっと机の下に隠れていた。理由は簡単だ、荒川がさっさからずっとこの化学室の前の廊下を行ったり来たりしているからだ。

「早くどこかに行つて。」

そう何度も小声で言い続けると、その願ひが叶ったのか荒川は2棟の玄関の方へ歩いて行つた。

私はドアから顔を出して荒川が戻つて来ない事を確認してから廊下に出た。

「えっと…、確か保健室はあの場所だから……」

「晶ちゃん!!」

突然後ろから声が聞こえて私はびっくりしてしまった。

「なんだ裕香^{ゆづか}かびっくりした。」

「ごめん…、でも会えて本当に良かった、さつきからずっと歩き回っているのに誰とも会えなくて怖かったから。」

「まあ、会えて良かったよ、私はこれから保健室に向かうけど裕香も来る?」

「勿論行くよ。」

そう言って私達は歩き出した。

暫く歩いてもうすぐ階段にたどり着きそうになった時階段から降りてくる女子がいた。顔は見えなかったが、私達は直ぐにその女子に声をかけた。

「おい」

その声をかけると此方に気付いたのかこっちに来ようとした。その時、

「また1人見つけた。」

そう声が聞こえた。

女子が後ろを振り向いた、その瞬間その女子の体が燃え上がった。悲鳴をあげる事も無くその女子は黒焦げになり階段を落ちていった。私達は恐怖で足が動かなくなりそうになりながらも、必死で荒川から逃げる為に階段を降りていった。

荒川は追いかけては来なかった。

+++++園町side…

俺達は3棟の2階にいた。

だけど俺達は無言だった。俺達の周りは酷い状態になっていた。白かった壁は赤く染まり、床には黒焦げになった死体がいくつもあった。中には手や足だけしか残っていないものもやその逆もあり、俺達は何度も吐き出した。

2棟へ繋がる通路まで来た時、やっと中林が口を開いた。

「園町君……この事は…」

「分かってるよ、大貴達には言わないよ。」

「そうだよね……、早く行こうか。」

「ああ…」

俺達はまた無言になり1棟まで歩いた。

+++++前原side…

「なかなか皆来ないな…大丈夫かな。」

あれからずっと待っているがまだ誰も来ない。

俺は心配になり保健室から出て少し辺りを見ようとしたとき、

「おーい、前原君。」

と声が聞こえた。

見てみると浅倉さんと杉崎さんがこっちに走って来ていた。

「浅倉さん、良かった！！気をつけて後ろに誰がいる。」

「いるのは裕香だよ。」

「違う、杉崎さんよりももっと後ろの方。」

「え……」

そう言うとき浅倉さんは後ろを振り向いた。

杉崎さんよりも大分後ろの方から走って来ている人物がいた。

「逃げるぞ」

そう俺は言って走り出そうとしたとき。

「ちょっと待ってくれー、違うぞ俺は荒川じゃあ無い俺だ。」

「藤原！！藤原なのか、良かった……。」

「浅倉さん達が走っているのが見えたから追いかけて来たんだよ。」

「それなら声をかけてよ。」

と杉崎さんが少し怒ったような口調で言った。

「遠すぎて何度声をかけても聞こえなかったみたいなんだよ。」

「まあ、ちゃんと合流出たからよしと言うことで。」

「確かにそうだね、それよりも他の皆は？」

その浅倉さんの質問に俺は少し沈んだ声で

「それが……まだなんだ。」

「そっか……」

「大丈夫だよきっと。」

杉崎さんが励ましの言葉をくれたが俺の気持ちは晴れずに

「そうだといいんだけど……。」

と答えた。

暫く沈黙が続いていたが

「おい、あっちの方に見えるの中林と園町ばいぞ。」

「本当か!!」

そう言って藤原が指した方向を見ると確かに2人組の人影が見えた。

「おい」

そう浅倉さんが呼ぶと2人は走って此方まで来た。

「良かった、2人とも無事だったんだな。」

「ああ、何とかな……」

何故か彰太の答えは歯切れが悪かったがその事を聞く前に藤原が喋り始めた。

「これで残りは風見と西沢さんだけだな。」

「いや……2人はメールの返信が来ないんだ。」

「え……て事は2人とも……」

「風見君はどうしてか分からないけど、優歌は機械音痴だからメール返せないよ。」

「……あ……」

男子が全員忘れていた事を浅倉さんが告げている時、杉崎さんが電話をかけているのが見えた。

++++++杉崎↓西沢side……

「あ、優歌？」

「裕香ちゃん、良かった〜今前原君からのメールを返せなくて……」

「どうやって返信って出来たっけ？」

「その返信はもうしなくていいから、今何処にいるの？」

「今は本館の職員室だよ。」

（本館とは1棟の別名である）

「私や前原君達は隣の保健室にいるから来て。」

「うん、分かった。」

+++++前原side…

杉崎さんの電話が終わってから1分もたたずに西沢さんは保健室まで来た。

「良かったー皆と会えて。」

「本当だよ、心配させて。」

「う……ごめん。」

「てゆうかメール返せないなら電話すれば良かったじゃあないか。」

「あ……そうだった。」

彰太の言葉に俺も

「しまった、そういう方法があったか。」

と後悔した。

「それなら柊にも電話をかけてみるよ。」

そう言つて中林が柊に電話をかけたが繋がらなかった。

「どうしたんだろ柊君…。」

西沢さんの不安そうな声に彰太が

「柊は逃げるのが得意だから大丈夫だよ。」
その言葉には俺も同意だったので

「そうだな、電話が繋がらないのは携帯の電源を切っているだけかもしれないし。」

「そうだといいいんだけど…」

「とにかくまずは俺達がとうするのを今は考えよう。」

その藤原が言つと

「確かにそうだな、おかしい事も幾つかあるし。」

「あ、やっぱり園町君も気付いてたんだ。」

と彰太と中林が言つた。

「え？おかしい事？」

浅倉さんの疑問に

「例えばこれだけの騒ぎになっているのに何故警察は来ないのか。」

「あ、確かにそうだ。」

「他にも、この学園にいる生徒が殆どいなくなっている事。」

「後、荒川はどうして学園の外には出ていけないのかとか。」

と彰太と中林が答えてくれた。

「そう言えばそうだな、荒川のやつずっと校舎のなかを歩き回っているみたいだし、て事は俺達が学園から外に出れば安全って事か？」

そう俺が言つと

「その可能性はある。」

と彰太は答えた。

「だったら外に出ようよ」

杉崎さんの言葉に全員が頷いた。

「出るなら裏口からがいいんじゃないかな？」

西沢さんがそう言ったが、中林が

「それは無理だ。」

と言った。

「どうして？」

「僕達が保健室に向かう途中窓から見えたんだけど……荒川のせいかは分からないけど、裏口の前の崖が崩れていて出口が塞がれていたんだ。」

「え、そうだったのか、気付かなかった。」

「それじゃあ正門から出るしか無いって事か？」

「そう言う事になる。」

藤原の質問に中林はそう答えた。

「正門の周りって何もないから見つけやすいよね。」

そう浅倉さんが言ったので俺は

「そうだな、荒川がどうして炎を出せるかは分からないけど、もし自分の好きな所に出せるなら、見つかったらいいかな。」

俺がそう言つと中林は

「うーん、それだけ危険になると正門から逃げるのは止めた方がいいな、もっと別の方法を探した方が良くよ。」

「でもこの学園は山の上にあるから正門と裏口以外の場所は全部崖だぞ、他にこの学園から出る道は無いよ。」

そう彰太が言った後俺が

「じゃあどうする？」

そう言うのと全員が無言になり時間だけが過ぎていった。
もう方法は無いと俺が諦めかけた時、突然

「そつた！！」

と西沢さんが声を出した。いきなり大声を出したのでびっくりしたが、俺は直ぐに冷静になり

「何か方法が見つかったのか？」

と声をかけた。

「うん、この学園だからこそ出来る方法を見つけたの。」

そう言うって西沢さんはその方法を話始めた。

第五章

炎と絶望と壊れた日常

了

第五章 炎と絶望と壊れた日常（後書き）

タグに【黒い炎】 【複数視点】 を追加

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8646k/>

despair

2011年10月7日00時30分発行